

2018年7月29日 川越教会

## 馬鹿な神様

丸山 勉

【聖書】 ルカによる福音書 15章 1節～10節

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いました。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくと、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくと、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

【序】 2018年7月が終わる

もう7月も終わろうとしています。この7月はこれからも長く記憶されるべき7月になったと思います。それは日本の最高気温を熊谷市が更新しただけではありません。大変な被害が広がった**西日本豪雨災害の年**となりました。また、あの23年前の**オウム真理教**による犯罪が裁かれ、その死刑囚だった13人が全員にその死刑が執行された7月になりました。

先日その刑が執行された一人に**林泰男**という享年60才だった人物（つまり事件当時は30代の若者です）について、その裁判の第一審の時なのですが、その裁判長の言葉は、その判決は極刑が妥当だとしながらも、心に残るものでした。

「林被告は中学三年のころから自己の**心の中の差別心**に思い悩み、二十歳のとき父親の死に遭遇したことを機に、まじめに**宗教への関心**を深めていた。教団への入信も林被告なりの**求道心**に裏付けられており、入信の動機自体を非難することはできない。林被告は教団や松本被告に幾度となく疑問を感じることもあったにもかかわらず、その都度、松本被告の指示をあえて正当化して信奉を完全に断ち切れないまま数々の違法活動をし、ついには重大な犯罪に関与した。そのことは、まさに林被告が基本的な生活信条として大切にしてきたという「人間としての良心」を失った者の所業と言うほかない。…おおよそ師を誤るほど不幸なことはなく、この意味において、**林被告もまた、不幸かつ不運であったと言える。**」

この世の中では、犯罪の「結果」で裁かれることはやむを得ないと思いますが、私はこの林死刑囚と一体どこが違うのだろう、という思いになります。彼はこの世の差別や矛盾に疑問を感じながら真面目に求道したのです。しかし、何と悲しいことでしょうか。この裁判長が言うように、**誰が自分の「師」であるのか、ということほど、人生にとって大切で、決定的なことはない**とやはり言えるのではないかと思います。

いや、私は「師」など必要ではありません、と言われる方もおられるかもしれませんが。けれども私は自分自身を振りかえって思います。その時は「自分」を「師」に、神様のような存在にしているのです。「私」という存在は、それ程過ちがなく、確かな者なのではないでしょうか？

### [1] 聖書と「笑い」

今日は、聖書の箇所は「聖書教育」に従うと、旧約聖書「創世記」の 21 章の初めの部分を読むことになっています。けれども、また来週も同じ 21 章から学びますので、創世記を丁寧に読むのは来週に回らせて頂きたいと思います。けれども、この 21 章の中で印象的な言葉があり、注目したいと思いました。それは、アブラハムとサラの間に男の子が生まれた、その出来事の部分で、母親になったサラがこう言うのですね。創世記 21:6 です。

「サラは言った。**「神はわたしに笑いをお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑い(イサク)を共にしてくれるでしょう。」**」

ヘブライ語で「笑い」を「イツハーク」と言うのだそうです。それで「イサク」なのですね。このところは又、「**神は私を笑わせて下さった**」とも訳せるそうです。ここには、**一方的な神様の恵みとして**息子を授かったそのサラ、また夫アブラハムの喜びが込められていますね。それまで二人は、この年齢になって子が与えられるなどは到底信じられず、自分たちの許にいたハガイという女の人とアブラハムによって生まれる子を自分たちの子にしよう、という**人間的な思惑**によって男の子を設けたのです。子どもの名前はイシュマエルと名づけられました。

その 13 年後です。神様が、アブラハムとサラの間に男の子を与える、そしてその子の名前を「イサク」と名付けなさい、わたしは彼と契約を立てる、と言われるのです。果たして、アブラハム 100 歳、サラ 90 才の時に、神様の言われたとおりに男子が生まれました。

私たちはともすると「子どもを作る」という言い方を無意識のうちにしないでしょうか。でもそれは、相応しくないように思います。不妊で悩む方も多くいらっしゃいますし、第一、「命」というのは、**最も深い神秘**ではないでしょうか。これは、**人間が造り出せるものではない**のです。「**与えられる**」ものです。「**授かる**」ものです。これは**神様からの「恵み」**なのです。この時のアブラハムとサラは、そのことを実感した

のではないのでしょうか。なぜなら、最初は神様の言葉にも「そんなことが有り得るはずはありません」と笑っていた、とある位ですから。

でもそういう者に御使いは仰いました。「**主に不可能なことがあろうか**」。かくしてその一年後にイサクが生まれたのです。**文字通り「一方的な恵み」**です。だからこそ、この喜びは、**単に子どもの誕生の喜びというより、神様への畏れと感謝に満ちた喜び**だったのではないのでしょうか。それを聖書は「神様は**「笑い」**を下さった」と表現しているのではないのでしょうか。「笑い」という言葉が、明確に現れてくる聖書の箇所はここ以外になく、意外なことかもしれませんが、新約聖書には無いのです。

## [2] ファリサイ派の人々や律法学者たち

先ほどお読みした創世記 21:6 では、節の後半でこうありました。「**聞く者は皆、わたしと笑い(イサク)を共にしてくれるでしょう。**」

ここを読んで、ああ、この言葉は、イエス様のたとえ話の中の言葉と共通するなあ、と思いました。

例えば、ルカ福音書 15:6。「友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。」とあります。ここでは「喜び」となっていますけれども、迷い出た羊を見つけた**羊の持ち主**（ここでは羊飼いと表現されていません）の**笑いが、笑顔が見えてくる**ではありませんか！

それに続く、無くした銀貨のたとえ話の中でも同じです。15:9 です。「見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。」と。ここでも**女の人の笑顔**が見えてきます。

素直に内容が理解できる、印象的なたとえ話です。しかしどうなのでしょう。ここでイエス様が語っておられることは、結構革命的と言いますか、**常識を超えた内容**が語られているように思います。

まず、このたとえ話をイエス様がされた状況を見る必要があると思います。こうありました。「**徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。**」と。

自分は正しい信仰者だ、まっとうな人間だと思っているファリサイ派の人たちや律法学者たちがイエス様のそばにいました。なぜなら、イエスという存在があまりに自由に、共同体からはつまはじきにされている徴税人、罪人に近づき、食事まで共にしている、そんな律法を守れないような者たちを受け入れるなんていうことは神様の掟に反することだ、何とか訴えてやりたいと思っていたからだと思います。そしてその心の中には、イエス様に対する嫉妬、やっかみがあったと思います。

ファリサイ派の人たちや律法学者たちは、徴税人、罪人という存在について、ユダヤ教の神殿を中心とする宗教生活からは**「排除」**されるべき、いわゆるまっとうな

存在ではない、**神様の恵みから漏れた、枠の外の人々**であると考えていたと思います。しかし、どうでしょう、これは決してこの時代の特殊な話ではないと思います。

### [3] この時代の問題性の中で

先週でしたか、ある女性の衆議院議員が、「**生産性のない LGBT には、税金を使うべきではない**」との持論を語り、物議を醸しています。私も酷い言葉だと呆れましたが、コラムニストの**小田島隆氏**がこのようなことをインターネットのコラムで書かれています。

「同じような考えを持っている人は残念ながら少なくない。私たちが暮らしているこの国には、**病弱**だったり**老齢**だったり**性的に少数派**だったり**思想的に異端**だったりするいずれにせよ「**普通でない人たちが**」**駆逐されたり、排除されたり、隅に追いやられたり**することを、人権侵害や弱者への迫害とは考えず、むしろ「社会の健全化に寄与する行動」ないしは「正しい淘汰の過程」と考える人たちが一定数存在している」と。そしてそのことに絶望的な気持ちになる、と書かれています。

そういう**他者を受け容れない思想**、それは LGBT の性的少数者に対してだけではないと思います。あの相模原市の障害者施設での殺人事件の犯人の優生思想や、韓国人・朝鮮人は帰れ！というヘイトデモなどが公然と行なわれたり、また沖縄の辺野古の埋め立てに反対して座り込んでいる者たちをごぼう抜きに排除することなど、みんなどこかで繋がっているのではないのでしょうか？

しかし私は、これは単に政治が悪いという問題だとは思いません。私たちの内側にも帰ってくる問題なのだと思います。**こういう時だからこそ、聖書の言葉、イエス様の言葉を真剣に聴くことが大事**なのではないかと思います。このたとえ話のイエス様の言葉というのは、甘っちょろい言葉ではないと思います。実に挑戦的だと思います。

### [4] 99 匹の羊と、迷い出た 1 匹の羊のたとえ話

たとえ話の初めにイエス様は「**あなたがたの中に**」と仰っているのです。これには初めて気付いた気が致します。遠いお話ではないのです。**自分自身のこととして**考えて欲しいということでしょう。そして語られます。

「**あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』**と言うであろう。」

ここで謎に思えるのは、**迷い出た一匹を探し出すのは理解できるけれども、99 匹野原に残して置くと言うのはどうなのだろう？** ということです。その間にまた他の羊が迷い出てしまったらどうするの？—確かにその通りです。私たちは「**計算**」するので

すね。たとえ1匹失われてもまだ99匹残っている。見つかるかどうか分からない、いなくなった羊を探すことはかえって危険なことではないですか、と。

ここで私は、先ほどの「生産性」という言葉を思い起こしました。**失われたものを探し出すほど「生産性」に反することはない**でしょう。見つかる保証はないのです。静かに電卓で計算するように、合理的に考えればやむを得ないと判断するのが「利口な人」でしょう。けれども、イエス様は**そんなことは全く念頭にない**言い方をされました。「**見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか**」と言い、或いは銀貨について「**見つけるまで念を入れて捜さないだろうか**」と仰っています。

先ほど、「野原に残された99匹はどうか」と考えてしまうこともあるのでは、と言いました。しかし、**そう言う時、私たちは自分が迷い出た一匹だとは考えてはいない**のではないのでしょうか。むしろ、そんな一匹のためにこちらが迷惑を蒙るのは御免だという「**淘汰**」の思想、「**排除**」の思想がどこかに横たわっていないのでしょうか？これが**私たちの心の中にある根深い「罪」**です。

けれども、もし私たちが、またあなたが、完璧でないにしても親であるなら、子どもが行方不明になったのなら、**あきらめなくて探し出そうとする**でしょう。（今回の西日本の災害の時もそんな映像が映し出されていましたね。）まして、**あなたを造られた神様**は、あなたが失われること、滅びていくことを涼しい顔をして「**あいつは生産性がないからこのままでいいよ**」なんていうことは決して仰らない、ということです。

「**見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか**」とある通りに、**主は生きて下さいました**。

神様の思いは、熱いのです。愛に燃えているのです。『**踊る大捜査線**』という映画がありましたけれど、神様は、会議室の中でじっと捜査の成行きをモニターで眺めているお方ではなく、「**事件は会議室ではなく、現場で起こっているんだ**」と言って、自ら危険を顧ずに現場の最前線に直行するあの刑事のような存在ではないかと思いました。どうしてそこまでするか？ 人間を愛しているからです。救いたいからです。**愚かな神様**です。損得を計算できない神様です。**この地上に、私一人しかいないように、どこまでもどこまでも迷子になった私という人間を追いかけて下さる神様**です。**どこまで追いかけられたのか。十字架までです。本当にお馬鹿な神様**です。人間のためにご自分が殺されることを選ばれた神様です。そこにあるのは、「**必ずこの人を救う**」という「**愛**」だけです。そして、あの十字架の上で「**今日、あなたはわたしと共に樂園にいる**」と、**私たち罪人の命を、神の子の命の中に招き入れ、もうあなたはわたしのものだ、どんなことがあってもお前と一緒に生きるよ**、と言って下さっているのです。

### 【結】「一緒に喜ぼう」

この「恵み」を知った私たちは、本当の意味の「喜び」を知るのです。「**さあ、一緒に喜ぼう**」と、誰よりもまず神様が喜び、祝宴を開いて下さっている、その宴に、この神様に見出された者はその喜びを分かち合うのですね。「**天使たちの間に喜びが**

**ある」と。それをこの地上で先取りしているのが教会の礼拝、また交わりではないですか？**

私たちは、聖書を通し、このまことの羊飼いを、**私たちのために責任を取り給う、命の「師」**を知らされました。このお方に結びつく時、そこには、「**恐怖**」でなく**必ず「喜び」**が生まれます。**聖霊ご自身**が私たちの内に宿って下さって、交わりの喜びを与えて下さいます。

一方的な恵みである「**イツハーク**」=「**笑い**」が、**行き交う教会**でありますように。私も、もっともっと笑っていきたいと思います。このキリストが下さる笑いにさらに多くの方々が出会い、その福音の喜びを分かち合うことが出来るよう、ご一緒に歩んで生きたいと思います。

お祈りをささげます。

主イエス・キリストの父なる神様

あなたの一方的な恵みを頂いている私たちです。決して当たり前の恵みではありません。私たち罪人一人ひとりを、追い求めて追い求めて、探し出して、あなたのふところに戻して下さる為に、私たちに代わって、独り子イエス様を十字架にかけて下さいました。

私たちは、さまよい、帰る道が解らなくなった羊のような者です。また、部屋の隅の暗がりに入り込んでしまった一枚の銀貨のような存在です。自分の力ではどうしようもないのです。けれども、あなたはその私たちを探し出すまでは帰ろうとなさらない方です。その大きな愛によって、今あなたの救いの中に入れられていることを感謝致します。

いつも自分中心のまなざしで他者を裁いたり、自分を裁いたりしてしまう私たちです。どうぞ、あなたの十字架の愛のまなざしを頂いて、赦しを頂いて、他者との関係、また自分自身との関係を生きることが出来ますように。

そして、あなたが下さる大きな喜び、心からの笑いをご一緒に分かち合うお互いとして下さいますよう、お願い致します。私たちが本当の平和を生きることが出来ますよう、さらにあなたの恵みを知るものとさせてください。

主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。